

満濃池

名勝指定記念シンポジウム

講演録

満濃池名勝指定記念シンポジウム
講演録

二〇二一年二月
まんのう町教育委員会

2021年2月
まんのう町教育委員会

毛宣写





湯瀬池と讃岐山脈（西より）



「ため池学習の日」 山西 勲さん撮影 平成 29年度フォトコンテスト銀賞

東表紙絵図は「象頭山八景 満瀧池遊鶴」弘化 2年(1845)

表紙写真に平成 29年度フォトコンテスト応募作品、美濃 透
さん撮影「恵みの池」の一部を使用させていただきました

美濃 透さん撮影「恵みの池」オリジナル→



例　言

1. 本書は、まんのう町教育委員会が香川県立ミュージアムの協力により実施した、「満濃池名勝指定記念シンポジウム」の講演録です。

「満濃池名勝指定記念シンポジウム」

日時：令和2年2月2日(日)13:00～16:10

会場：まんのう町民文化ホール

第1部 基調講演

テ　ー　マ：名勝満濃池の風景とその魅力

講　　師：井原　縁（奈良県立大学教授：造園学・環境デザイン学）

第2部 パネルディスカッション

テ　ー　マ：未来へつなぐ満濃池

パネリスト：國重　進（満濃池土地改良区理事長）

平澤　毅（文化庁文化財第二課名勝部門主任文化財調査官）

増田拓朗（香川大学名誉教授：造園学・緑化工学）

井原　縁（奈良県立大学教授：造園学・環境デザイン学）

栗田隆義（まんのう町長）

コーディネーター：信里芳紀（香川県立ミュージアム主任文化財専門員）

2. 「満濃池名勝指定記念シンポジウム」の活字化は、当日の録音記録をもとに、まんのう町教育委員会生涯学習課文化財室が行いました。

3. 活字化した原稿を元に、講師・パネリスト・コーディネーターが必要に応じて加筆修正し、まんのう町教育委員会が最終的な調整をしています。このため、本書の内容とシンポジウム当日の内容は、完全な同一ではないことをご了承ください。

4. 本書の編集は、まんのう町教育委員会生涯学習課文化財室が行いました。

5. 「満濃池名勝指定記念シンポジウム」の実施及び本書の作成にあたり、以下の方々のご教示、また関係機関のご協力を賜りました。記して謝意を表します。

井原　縁、國重　進、平澤　毅、増田拓朗、信里芳紀、松本和彦、浅野雅也、廣瀬孝善、末久和幸、首原良弘、神野寺、神野神社、四国旅客鉄道株式会社、丸亀市立資料館、満濃池土地改良区、まんのう池コインネット、まんのう町文化財保護協会、香川県立ミュージアム、香川県教育委員会、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、文化庁

(敬称略、順不同)

目 次

■ 開会のあいさつ 1

■ 第1部 基調講演 2

テ　ー　マ：名勝満濃池の風景とその魅力

講　　師：井原　縁（奈良県立大学教授：造園学・環境デザイン学）

■ 第2部 パネルディスカッション 21

テ　ー　マ：未来へつなぐ満濃池

パネリスト：國重　進（満濃池土地改良区理事長）

平澤　毅（文化庁文化財第二課名勝部門主任文化財調査官）

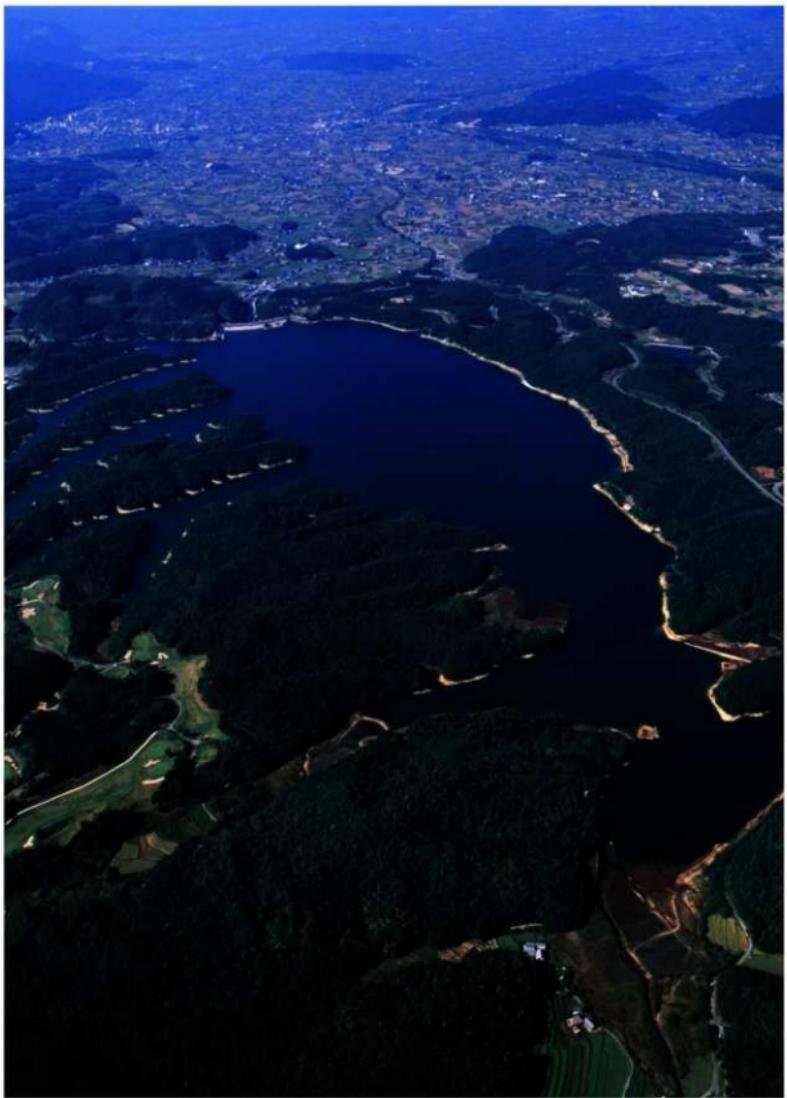
増田拓朗（香川大学名誉教授：造園学・緑化工学）

井原　縁（奈良県立大学教授：造園学・環境デザイン学）

栗田隆義（まんのう町長）

コーディネーター：信里芳紀（香川県立ミュージアム主任文化財専門員）

■ 閉会のあいさつ 35



満濃池と丸亀平野（東より）

開会のあいさつ

【司会】 只今より、満濃池名勝指定記念シンポジウムを開催いたします。

名勝とは、「庭園、橋梁、峡谷、海浜、山岳その他名勝地で我が国にとって芸術上又は觀賞上価値の高いもの」のうち、重要なものとされています。すぐれた国土美の有様を様々ななかたちで表現する名勝は、風致景観の觀賞を通じてその価値を發揮する記念物です。

満濃池は、自然的価値、人文的価値が高いことから、令和元年10月16日に国の名勝に指定されました。ため池としての指定は、全国で初めてです。

名勝指定の件数は、全国で418件うち特別名勝が36件で、香川県では特別名勝の栗林公園をはじめ、寒霞渓、琴弾公園、象頭山、玉藻公園内の披雲閣庭園に満濃池を加えて6件となりました。

満濃池の名勝指定は、地権者や関係者のご理解とご協力の賜物と深く感謝申し上げます。

本日のシンポジウムは、名勝としての価値を知りいただき、すばらしい満濃池の景観を保護し、未来へつなげていく目的で開催いたします。

本日の司会進行は、まんのう町教育委員会生涯学習課 課長松下が務めます。

開演にあたり、主催者を代表して、まんのう町長 栗田隆義がご挨拶を申し上げます。

【町長】 本日は満濃池名勝指定記念シンポジウムを開催いたしましたところ、年初めの大変お忙しい中、また大変お寒い中、大勢の皆様方にご出席をいただきましてありがとうございます。

先ほど司会の方から説明がありましたように、満濃池は昨年の10月16日に国の名勝に指定されました。香川県では6番目、ため池としては全国で初めての名勝指定となりました。

満濃池はまんのう町の町名の由来にもなっ

ていまして、弘法大師空海が修築したこと有名です。我々、まんのう町としての大きな財産です。

今日はこの後、第1部で井原先生の基調講演が行われます。井原先生は香川県出身で、お母様にも、現在行っています地方創生の有識者会議の一人としてご協力いただき、まんのう町は非常にお世話になっています。皆様方にはしっかりと聞いていただきたいと思います。

その次に、パネルディスカッションがあります。私も参加することになっています。

このシンポジウムを通じて、満濃池のすばらしさ、価値を今一度、皆様方に知りていただく機会となればと思っています。どうぞよろしくお願い申し上げまして、開会のあいさつとさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。



開会時のステージ風景



町長、開会のあいさつ

第1部

基調講演

「名勝満濃池の風景とその魅力」

井原 縁

ありがとうございます。そして、このような貴重な機会に話をさせていただくことに、改めて感謝申し上げます。(スライド 1-1)

名勝満濃池の風景とその魅力

スライド 1-1

【司会】 それでは、第1部の基調講演をおこないます。

基調講演は、「名勝満濃池の風景とその魅力」と題し、奈良県立大学教授 井原縁先生にご講演をいただきます。

はじめに、講師のご紹介をいたします。

井原縁先生は、高松市出身で、京都大学大学院農学研究科にて造園学を専攻され、農学博士を取得されています。現在は、奈良県立大学地域創造学部で、環境デザイン学、文化遺産論などを授業されています。

また、名勝や公園に関する多くの審議会委員などをされています。

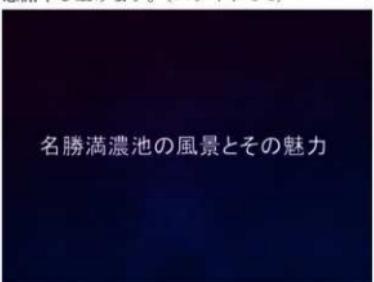
研究テーマは、史跡、名勝等、歴史文化遺産のランドスケープ計画に関する原論的および方法論的研究と、ランドスケープ遺産としての景勝地の評価に関する原論的研究であります。

主な著書に「47都道府県 公園・庭園百科」、「みやこの近代」、主な論文に「奈良と歴史的風土」、「遺産空間の継承と変容」など多くの著書や論文を発表されています。

満濃池名勝地調査委員会においては委員をしていただき、名勝指定に大きくご貢献をいただきました。

それでは、井原先生、よろしくお願ひいたします。

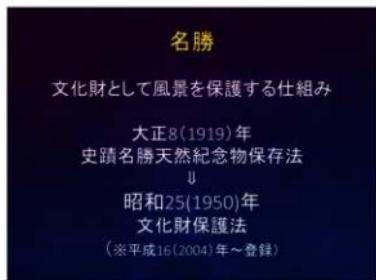
【井原】 ただ今ご紹介に与りました、奈良県立大学の井原です。本日は皆さま、満濃池名勝指定記念シンポジウムにご参集いただき大変



この講演の趣旨は、皆さまに満濃池とはどういう場所なのだろうということを改めて考えていただきたい、そのための話題提供です。その後、第2部のパネルディスカッションを通じて、さらにその点を考えていただければと思います。

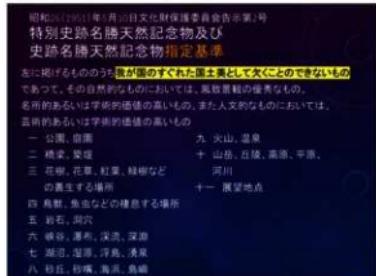
先ほどご紹介いただきました通り、私自身、香川の生まれです。満濃池は小学校の時に地域学習として勉強し、訪れました。そして縁あって、研究者という立場で改めて満濃池に深く関わる機会を得ました。そのなかで満濃池の深さ、豊かさに触ることができました。そして改めて満濃池を見つめると、子供の頃とは満濃池の風景が違って見えてきました。満濃池が名勝に指定されたということは、満濃池の価値を問い合わせし、その大事さを改めて見つめ直す機会ではないかと思っています。

ではまず、後程パネルディスカッションで文化庁の平澤さんからお話があると思いますが、簡単に「名勝」とは何かということから話を始めたいと思います。(スライド 1-2) 非常にシンプルにいうと、文化財として風景を保護する仕組みです。この仕組みがスタートしてちょうど100年を超えるとしており、風景を保護する仕組みのなかでは最も古いものの一つで



スライド 1-2

す。名勝の具体的な指定基準として挙げられているのが、「我が国の優れた国土美として欠く事の出来ないもの」です。要は、「我が国の優れた国土美」というものを考える上で、非常に大事な風景、風景地が名勝になっていくということです。(スライド 1-3)



スライド 1-3

こちらは、満濃池を訪れる人がよく撮る写真の一つだと思います。(スライド 1-4)堤塘から



スライド 1-4

南東の方向を向いて撮った写真ですが、この風景を目にして満濃池に訪れて「あ、ただため池だな」と思う人は、そんなにいないのではないかと思います。なぜかしばらく足を止めてしまう、なぜかわからないけれどもどこか心を動かされる場所だと思います。名勝になる場所というのとは、単純に日本最大級のため池であるという、むろんこれだけでもすごいことなのですが、それだけではない何か、人間が時を越えて古からその場所に訪れた時に心動かされるような、人の心に直接訴えかける何らかの力を持つているような場所が、名勝になっていくと私は考えています。満濃池は、まさにそういう場所です。

そして人がある場所を訪れて、とても心を動かされた時に何をするかというと、その自分の心の動きを何かの形で表現しようとなります。その最たるもののが、文芸作品や美術作品です。歌に詠んだり、絵を描いたり、写真を撮ったり、そういう表現をするのです。すなわちそういう表現がたくさん生まれる場所というのは、それだけ古から色々な人の心を揺り動かしてきた場所だといえます。満濃池というの、まさにそういう場所で、満濃池を題材とした様々な文芸作品や美術作品が非常に数多く積み重ねられてきました。

それは、古代まで遡ります。古代の説話集、今昔物語のなかに、満濃池に関する話が出てきます。そして、中世を経て、何度も決壊と再築を繰り返してきた近世において、満濃池は様々な表現媒体で描かれ、語られ、広がっていきました。さらに、近代から現代に至る流れのなかでも、写真や絵、俳句、短歌といった数多くの作品が生まれてきました。ただの広いため池だけではない、何かここに訪ることで人の心を揺り動かすようなボタンシャルが詰まっているのが、この満濃池なのです。

では、何が人の心を揺り動かしてきたのでし

ようか。名勝に指定するに当たっては、それを明らかにする作業が大事になります。他の委員の先生方、現場の行政官の方々と一緒に協力しながら、じっくり迫って考え、それを踏まえて名勝指定に至りました。

今回、私が皆さんにお話しするのはその内容です。すなわち、人々が古くからこの満濃池に訪れて、どのように心動かされてきたのか、何をこの満濃池の素晴らしさとして捉えてきたのか、その内実をお話ししたいと思います。

先ほど言った通り、古代の今昔物語から、最近のリーフレット、パンフレットといったところまで大きな時間軸で、満濃池の表現内容を追いかけていくと、大きく4つの捉え方、価値認識がなされていることがわかりました。

まず1つ目は、スケールの広大さです。(スライド1-5)ただし、この捉え方というのが、非



1. スケールの広大さ

スライド1-5

常に奥が深いのです。では、今昔物語集からみていきます。(スライド1-6)このなかで、満濃池の情景がどのように表現されているのか。そのうちの一部ですが、次のような表現に端的に表れています。「池の周囲ははるかに広々としており、堤を高く巡らしている」「まるで海のよう」で「底知れぬ深さ」がある。それからもう一か所、「池の周りは延々と遠く連なり、堤も高いので、とても池とはおもわらず、海などの様に見えた」、「対岸ははるかかなたにかすかに見えるほど」、「尽きることない大小多くの魚」

『説話集』『今昔物語集』に記された満濃池の情景

・「池の周囲ははるかに広々としており、堤を高く巡らしている」

「海のよう」「底知れぬ深さ」

(巻二十 本朝 脊山法 第十一 寿王丸天狗被斬日)

・「池の回りは延々と遠く連なり、堤も高いので、

とても池とは思われず、海などのように見えた」

「対岸ははるかかなたにかすかに見えるほど」「尽きることない大小多くの魚」

(巻二十一 本朝 脊山法 第十二 須林区満濃池被斬日)

池面の広さ+堤壠の高さ=広大なスケール

スライド1-6

がいると表現されています。このような表現からは、特に、池面の部分が大きいことに加え、それを生み出している「堤の高さ」とがセットになり、満濃池の広大なスケールが認識されていたことがわかります。

同様の認識は、満濃池が決壩した後、長期にわたり放置され、耕作地と化して池中に村ができた中世を経て、近世に入ると再び立ち現れます。(スライド1-7)近世は満濃池が決壩、修復、

『金毘羅山名勝図会』(文政～天保年間(1818～1844))
に記された満濃池の情景

・・・池水常に湛へ池のまはりははるかに高く堤高ければ
池とは更に見へず瀬水のやうすそ見へける
廣さはかなたに居る人のかすかに見へ
野飼いの馬は鳥と見ゆるほとなり
水洋洋として百瀬のごとく 万山影を逆しまる」

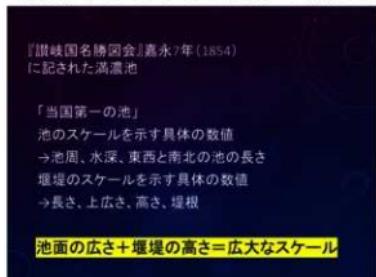
池面の広さ+堤壠の高さ=広大なスケール

スライド1-7

決壍、修復を何度も繰り返した時代ですが、特に数多く生み出された地誌類において、次のような描写をしばしば見てとることができます。例えばこれは『金毘羅山名勝図会』のなかの記述ですが、常に池の水を湛えていて、非常に広い池面で、堤が高く、池とはみえないくらいの広大なスケールだと表現されています。スケールの広大さを認識する視点が、古代と基本的に同じであることが指摘できます。すなわち池の

面積が非常に広いことプラス、堰堤の高さという、このセットです。

同時代に出された「讃岐国名勝図会」を見てみます。(スライド1-8)「当国第一の池」と書



スライド1-8

かれていますが、このなかに具体的な数値が記載されています。その数値の内容は2種類です。一つが池そのもののスケールを示す数値です。池の周囲がこれだけ広い、深さがこれだけ広い、そして東西と南北の広さがこれだけあるというものです。もう一つが堰堤の高さで、先ほどどの数値と併せて記載されています。堤の長さ、上部の広さ、高さ、それから堤根がどのくらいあるかというものです。ここでもまた同様に、「池面の広さ」プラス「堰堤の高さ」で満濃池の広大なスケールが捉えられていることがわかります。

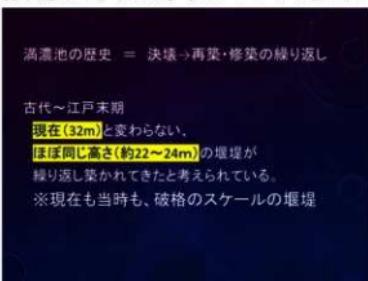
これはちょうどこの頃に堰堤構築の大規模な普請つまり工事が描かれたものです。従って、主題としてそもそも堰堤の高さを強調するという偏りは元からあります。(スライド1-9)ただ、そういった主題ゆえの誇張を差し引いたとしても、この絵図もまた非常に池面が広く描かれており、その先が見えないです。ただし、手前は圧倒的に高い堰堤が描かれていて、この高さをより印象付けるように、余水吐からの流れが激しく落ちてきています。これもまた池面の広さと、堰堤の高さとのセットで満濃池の広さが認識されているひとつの証左といえる



スライド1-9

のではないかと思います。

さて、では実際にその堤はどのくらい高いのでしょうか。満濃池の歴史において、特に近世では、決壊しそれを再築ないし修築することを繰り返してきました。(スライド1-10)さらに



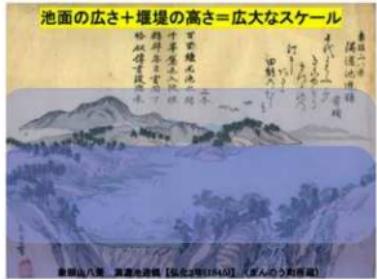
スライド1-10

近代以降、嵩上げを繰り返し現在、約32mの堤の高さです。ただ、近世のありようも記録で辿ると約22m~24mの堰堤が繰り返し築かれてきたということです。現在においてもこれだけの堤の高さというのは破格のスケールです。ましてや当時においては、非常に破格のスケールの堰堤です。これだけの人が、しかもものすごく水圧がかかってくるなかで、命がけの工事で積み上げてきた人知の結集による堰堤の高さと、それによって生み出されてきた広大な水面、単に物理的な広さだけではないスケールの認識がされていたのではないかと考えることができます。

これらの絵も同様です。(スライド 1-11・12)



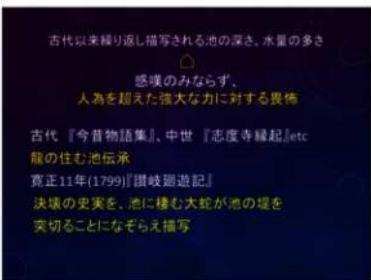
スライド 1-11



スライド 1-12

特に近世に出された地誌の挿絵や絵画を見ていくと、その視点や視角はやや異なるのですが、基本的にはいずれも、このように高い堰堤を手前に印象強く描いています。そして、その先に広大な池面を描くという構図が一般に用いられています。

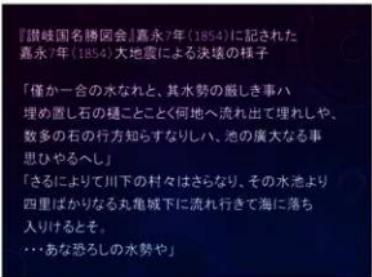
今、満濃池のスケールが、「池面の広さ」と「堰堤の高さ」のセットで認識されていたという話をできましたが、実は近世の地誌類をよく見てみると、満濃池の広大なスケールを語るもう一つの観点が非常に明確に表れています。(スライド 1-13)それは何なのでしょうか。この観点は既に古代から見てとることができるのでですが、特に近世において非常に顕在化しています。それは、満濃池が元々持っている水の勢い、秘めている水の力の激しさです。「感嘆」だけではなく、人為を超えた非常に強大な



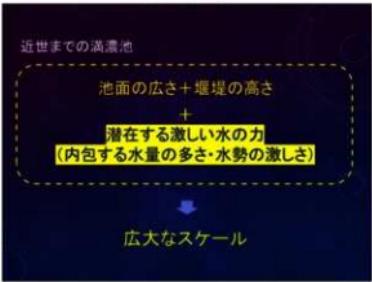
スライド 1-13

力に対する「畏怖」と共に、満濃池が持っている水の勢いの強さに関する記載がなされています。これは遡ると、満濃池に付随する龍あるいは大蛇といった伝承にも通じる精神性だと指摘することができます。古代における今昔物語集、そして中世の度志寺縁起等々、満濃池の龍伝説、大蛇伝説を語る物語は繰り返し登場しますが、1799 年に描かれた「讃岐廻遊記」の中では、満濃池が決壊したという史実を池に潜む大蛇が池の堤を突切って行ったということに準えて描写をしています。それだけ持っている水の力というものに対するある種の畏怖であり、そのスケールの強大さに対する思いが見てとることができます。

同じく近世に描かれた「讃岐国名勝団会」においても同様の観点はみられます。これは嘉永 7 (1854) 年の大地震による決壊の様子が描かれたものですが、その水勢の厳しさと、丸亀城下に流れ行って、海に落ち入りける程の、「あんな恐ろしの水勢や」、すなわち特に近世までの満濃池というのは、その決壊が繰り返されてきたという事実も相まって、池面の広さと堰堤の高さに加え、この池が持っている潜在する激しい水の力、内包する水量の多さや水勢の激しさ、これを総合的に認識して捉えていたことがいえるのではないかと考えられます。(スライド 1-14・15)これら全体によって満濃池の広大なスケールが認識されていたということ



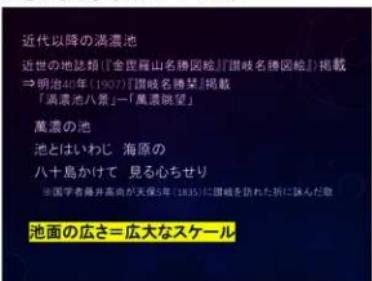
スライド 1-14



スライド 1-15

です。

では次に、近代以降の満濃池を見ていきたい
と思います。(スライド 1-16)



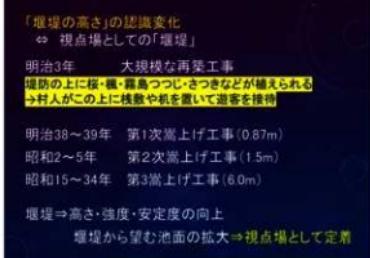
スライド 1-16

まず、この歌「萬濃の池 池とはいわじ 海原の 八十島かけて 見る心ちせり」は、満濃池の
池面の広さ、海のように広いそのスケールの大
きさを愛でている歌です。先ほど何度か紹介した
近世の地誌類のなかで、よく挿絵の賛の部分

に使われています。また、明治 40(1907)年の
「諏岐名勝栄」に掲載された「満濃池八景」の
一つ、「萬濃眺望」を表現する歌としても使用
されています。この歌が満濃池の広大なスケー
ルを表現する一つの象徴として大事にされて
いた、ということがいえます。近世から近代へ
と、満濃池の広大なスケールは愛でられ続けて
きたわけです。

ただし、それを認識するにあたって、先ほど
申し上げた通り、近世までは池面の広さと人の
築き上げてきた堰堤の高さ、それから満濃池が
内包している水の力の激しさ、この3点から総
合的に捉えていましたが、後者2点に関して、
少し、近代以降その内実には変化がみられます。

まず1つですが、明治それから昭和と3回
の大きな嵩上げ工事が行われました。(スライ
ド 1-17)それによって堰堤は高さを増し、かつ



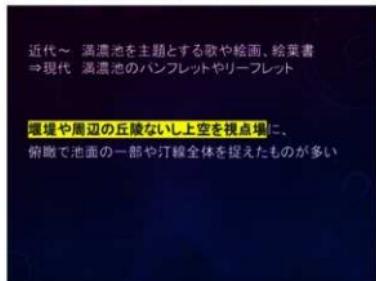
スライド 1-17

近代的な土木技術によって強度や安定度が格
段に向上し、決壊はみられなくなっていました。
このなかで、堰堤というものが別の意味合
いを強く持ってくるようになります。

私が最初に皆さんにお見せした写真を想
出してください。今、満濃池を訪れる人々が写
真を撮る視点場は堰堤です。近代以降は堰堤が
基本、満濃池を見る視点場として機能していく
のですが、その反面、その視点場自体のスケー
ルに対する意識は薄らいでいきました。堰堤は
高くなり安定し、堰堤から望む池面の広がりも

増して、享受できるようになったのだけれども、その反面、その足元にある堰堤のスケールに対する意識が低くなっていくわけです。堰堤が池面を愛でる視点場として定着していた事実を物語る証左の一つとして、明治3(1870)年の大規模な再築工事の時に、堤防の上に桜や楓、あるいは躑躅や臘月などを植え、村人がこの上に色々な物を置いて遊客を接待していたという記録が残っています。

近代において出された満濃池を主題とする歌や絵画、絵葉書、さらに現代における満濃池のパンフレットやリーフレットに、同様の傾向を顕著に見てとることができます。(スライド1-18)これらの構図をみてみると、視点場は堰



スライド1-18

堤か、あるいはそれよりちょっと高い所から見下ろすことのできる周辺丘陵か、上空からの俯瞰景です。そこから池面の一部あるいは汀線の全体を捉えたもの非常に多いと指摘する事ができます。

例えばこのような構図です。(スライド1-19・20)そして近年のパンフレットです。(スライド1-21)堰堤あるいはそれも含めて上空から見ることによって満濃池の池面の広さ自体は認識できますが、堰堤自体の高さやスケールといった認識は近代以降、薄らいでいるのではないかと指摘できます。(スライド1-22・23)

そして、2つ目ですが、(スライド1-24)潜在する激しい水の力、内包する水量の多さとか、



スライド1-19



スライド1-20



スライド1-21

水勢の激しさに関しても、近代以降その捉え方には変化が起こっています。この認識の低下は堰堤が強度、安定度を格段に増し、決壊しなくなったことが背景にあると考えられますが、ただしそのなかで、満濃池が内包する水の力の記憶や感覚を多くの人々に呼び覚ます場として機能し続けているのが、「ゆる抜き」の行事で



スライド 1-22

近代～ 満濃池を主題とする歌や絵画、絵葉書
⇒現代 満濃池のパンフレットやリーフレット

堰堤や周辺の丘陵ないし上空を視点場に、
俯瞰で池面の一部や汀線全体を捉えたものが多い

「堰堤の高さ」自体への認識の薄れ

スライド 1-23

「潜在する激しい水の力
(内包する水量の多さ・水勢の激しさ)」の認識変化
⇒ 強度・安定度の向上(×決壊)



スライド 1-24

はないかと指摘できます。

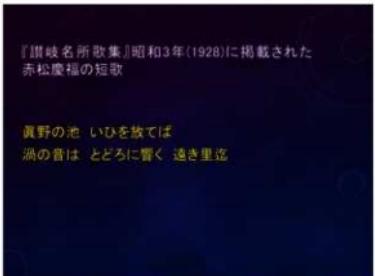
この日を境に、丸亀平野では一斉に田植えが始まり、まさに中譜地域の田んぼを広く潤す、一大灌漑施設である満濃池のため池としての機能が最も発揮される場です。豊作への神事に始まって、太鼓の合図で取水塔のハンドルが回され、凄い音と共に水煙を上げながら、毎秒5tの水が一気に流れ出していきます。

もとは巨大な木製の「ゆる(池の取水栓)」を地元の男性達が大人数で抜く仕組みだったのが、近代になり取水塔ができるからは、樋門を開き、取水塔から取水や送水を開始する仕組みに変わり、しかも、その後それがどんどんシステム化されて現在に至ります。(スライド 1-25)



スライド 1-25

このようにゆる抜きの内容というものは変化していますが、そこで放出される水の激しさ、その凄まじさはずっと継承されています。香川県の歌人である赤松景福さんが、次のような歌を詠んでいます。(スライド 1-26) 「眞野の池



スライド 1-26

いひを放てば 渦の音は とどろに響く 遠き里迄」。こういった歌からも、その放出時の水の激しさ、凄まじさは窺い知ることができます。

そして、このゆる抜きは、その受益者のみならず、県内外から多くの見物者が訪れる初夏の風物詩にもなっています。(スライド 1-27) 写



スライド 1-27

真を追いかけてみると、土地改良区が所蔵する古い写真では、大正3(1914)年、つまり取水塔のシステムに変わる以前の初ゆる抜き(スライド1-28)も、取水塔後のゆる抜きも、非常に多く



大正3(1914)以前の初ゆる抜き（満濃池土地改良区）

スライド 1-28

人々で賑わっていることがわかります。(スライド 1-29)この場でゆる抜きを共通体験



昭和3(1928)ゆる抜きの風景（満濃池土地改良区所蔵）

スライド 1-29

することで、満濃池の持っている灌漑施設としての機能の価値共有とともに、やはりここ持

っている水の力、水の激しさを身体感覚で共有しているのです。しかも、毎年定期的に、それを感じ続けているわけです。恵みや祈りと共に、ずっとこのゆる抜きによって、私たちは満濃池の持っている水勢の激しさを受けとめ続けてきているということがいえるのではないかと思います。

このゆる抜きは平成8年に「残したい“日本の音風景100選”」に選出されています。「ゆる抜きにより放出される水音が豊作を祈る人々の心に深く響き渡る」と評されており、見た目のみならず、音によって、まさに身体感覚によつてここの持っている水の淵さやスケールを実は体感している、非常に重要な機会といえます。(スライド 1-30・31)



スライド 1-30



スライド 1-31

さて、話を戻しましょう。(スライド 1-32)満濃池に対する2つ目の捉え方です。これは、固有の立地環境に対するまなざしです。では、そ



2. 固有の立地環境

スライド 1-32

そもそも満濃池は一体どのような場所に築かれているのでしょうか。

満濃池は、丸龜平野を流れる金倉川の上流に位置します。(スライド 1-33) そして、香川と



スライド 1-33

徳島県境にある讃岐山脈から北へ派生した谷の最も狭い所に、堰堤を構築して造り出されたものです。よく見ると非常に複雑な形をしています。今回皆さんの記念品で出ているクリアファイルですが、満濃池の形の複雑さ、面白さが非常に良くわかります。改めてこれを確認してみてください。とても変な形をしているのです。なぜこんな形になっているのかというと、満濃池は、堤塘の部分以外は、自然の丘陵が堤体の役割を果たしています。つまり、地質によって削り取られ易い所とそうではない所というのが自ずと出てくるわけです。(スライド 1-34・35) 一部人工だけれども、人工と自然の調和のなかで生み出されているものが満濃池なので、



スライド 1-34



スライド 1-35

自ずとこういう形になるのです。谷狭窄部の堤塘以外は、自然地形を堤として利用しているからこそ、こういった一様ではない池岸の姿が造り出されてくるのです。(スライド 1-36・37)

このあたりようは、今回の名勝のシンボジウムに併せて撮られた写真を見ると最も良くわかると思います。(スライド 1-38) 堤塘から南東の部分を望むと、まず広い池があって、池面があって、そしてその背後に讃岐山脈がブワーッと屹立している状態です。池の周囲をよく見てみると、対照的に低くなだらかで、特に南側は、浸食を受け易いため複雑で入り組んだ構造をしています。北側は、比較的硬質な砂礫層の地層に覆われているので、そんなに削られていないのです。このように、南が非常に複雑に入り組んだ岬の状態になっており、北の方はそうではないことによって、対照的な汀線形状になっています。なぜかというと、くりかえしている



スライド1-36



スライド1-37



スライド1-38

通り、堤塘と自然地形の調和のなかで作り出されてきたものが満濃池だからです。このような立地環境をみてみると、まさに、本来の自然の持っている力と非常に上手く折り合いを付け、それと調和させながら、人間の営みによって造り出されているのが満濃池というため池だとわかります。

これがまさに立地環境の特性なのですが、こ

の特性に関する表現が非常にたくさんあり、しかもその素晴らしさへの評価と共に表されています。(スライド1-39) 今昔物語にも表れて

『金毘羅山名勝図会』文政～天保年間(1818～1844)
に記された満濃池の情景

「**池南の方 大山といふよりは万谷の山なり**、右に通りきたる其の山と谷よりおつる水を野の方山の端のさに向いたる山内
の四十間たるすの處に架て其内を池とした故の名とて門内の
池と云ふはあらぬと水源は千山屏風を立たるがごとく 万谷より
山根を流れ水常に満へ池のまほははるかに遠く高ければ
池とは更に見へず湖水のやうすと見へける廣さはかなに居る
人のかかに見へ山野駒の馬は鳥と見るまほとなり水洋々として
百萬のこく万山形を説しまる松柏森森をして谷を以て森隣
として恒に頑雨を施し万々たる異水傍水がひたり岸をあ
わす水鳥野鷺は葦口にまい遊ぶ種矢君は首次並ぶ水流半筋に
照て田画の料とし…」

立地環境の地形的特性的詳細記述
周囲の自然環境とのつながりのものと満濃池を認識

スライド1-39

いますが、特にこのような価値認識を顕著に見てとることができるのは、近世の地誌類です。例えば次のような表現があります。特に黄色で示している箇所に注目ください。まず非常に多くの山々が南の方に広がっていると書かれています。そしてその一帯の環境について、池の背後に広がっている景観を非常に丁寧に書き、どのように水が流れ落ちて満濃池になっているのか、そして「千山屏風を立たるごとく」、「万谷より地股を垂れ」、「峩々(がが)たる岸をあらわし」などと表現されています。これらの言葉は、すべて満濃池が立地する環境を、周囲の自然環境との繋がりのなかで満濃池のありようを表現しています。かつ、それを評価する表現と共に、立地環境の具体的特徴が丁寧に書き込まれています。周囲の自然環境との繋がりのなかで満濃池の存在を捉えている、総合的な捉え方で満濃池の存在を認識していることがわかります。このことは文章のみならず、当時描かれていた絵画からも見てとることができます。

例えば、このような姿が描かれています。(スライド1-40)よく見ると、視点がかなり引いたところにあることが分かります。堤塘の高さはこここの部分です。池、背後に広がる山々、そし

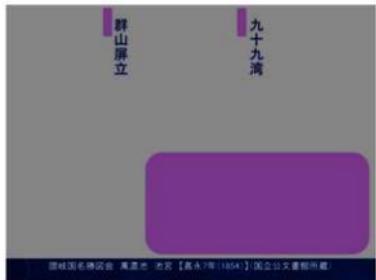


金武山名勝図会 写本 547 | 他人所蔵 | 高麗絵出番川筆立ミュージアム

スライド 1-40

て変化に富む地形のありようが描かれています。これが、非常に広い視野で捉えられます。実際には、これを一つの視点場から直接見ることはできません。今でこそ先程の写真の様にドローンを飛ばすと見ることはできますが、当時この捉え方ができていたというのは、色々な視点場や色々な角度から満濃池を捉えて、総合的にこの満濃池がどういう周りの自然環境との繋がりのなかで成立しているのかということが、身体感覚で分かっていないと描けない図面です。

同様に、もう一つ「讃岐国名勝図絵」の描かれ方を見て下さい。(スライド 1-41) こちらは



スライド 1-41

より詳細に、そして山に関してはその名前も含めて描かれています。満濃池を池面だけではなく、池の面があって、そしてその背後に屹立する山々があって、そして変化に富んだ、この岬状の地形、そしてそれと対照的ななだらかな岸

の姿で描いています。このなかの贊にも「群山屏立」、さらに「九十九湾」という表現がみられ、そして手前をよく見ると高い堤塘、池之宮、余水吐から流れしていく激しい水が描かれています。切り取って満濃池を捉えるのではなく、それが立地する周囲の自然環境との相互関係、相互の繋がりのなかで満濃池の存在を認識しているということがいえます。

このような周囲との自然環境の繋がりのなかで満濃池の固有の立地環境を捉える視点は、特に近世に描かれた絵画・挿絵に共通してみえます。これは、先ほど出した絵なのですが、先が見えない。でもこの構図は、手前に高い堤塘があり、満濃池が周りの繋がりのなかでどうおさまっているのか、全体の自然環境のなかで、どういう繋がりのなかで、この部分が成立し得るのか、というのを捉え表現している絵といえます。(スライド 1-42)



スライド 1-42

しかし、この視点も、近代以降少しずつですが減っていると指摘できます。(スライド 1-43) 近代以降、満濃池を主題に描かれている絵葉書や写真、絵を見ていくと、先ほど指摘した通り堰堤から、あるいはもっと上空から切り取って見る構図になっています。特に多いのが取水塔に焦点を当てている構図、もしくは池の汀線の形を明確に捉える構図のどちらかです。このように、取水塔に代表される近代的な土木構造物、あるいは、池の岸の特徴的な物理的形状といつ

近代～ 近代的土木構造物や、池岸の特徴的な形状といった、個別の「要素」に焦点を当てた景観の切り取り



黒崎平子所蔵美術品【昭和初期】(香川県立ミュージアム所蔵)

スライド 1-43

た、個々の要素に焦点を当てた景観の切り取りというものが、近代以降は主になされていくようになります。(スライド 1-44)



黒崎平子所蔵美術品【大正3年（1914）】(香川県立ミュージアム所蔵)

スライド 1-44

そして、私たちもまた、その捉え方の延長にあります。先ほどご紹介した写真ですが、取水塔は昭和 30 年に赤レンガからコンクリート製に置き換わり、そしてその内容も、よりシステム化されていきます。このような変化の後も、これは土地の画家の作品です(スライド 1-45)が、取水塔をフォーカスポイントとした構図の絵画をたくさん描かれています。その他様々な写真の中にも、取水塔にフォーカスを当てたり、それを映り込ませたりする形で景観を切り取る構図がよくみられます。(スライド 1-46)ということで 2 点目、固有の立地環境について、従来は周辺環境との繋がりのなかで満濃池の存在する場所全体を総合的に捉えるという



小西嘉純、油彩『満濃池』【平成14年(2002)】(町立かりん会館所蔵)

スライド 1-45

近代～ 近代的土木構造物や、池岸の特徴的な形状といった、個別の「要素」に焦点を当てた景観の切り取り



黒崎平子所蔵美術品【昭和初期】(香川県立ミュージアム所蔵)

スライド 1-46

ことが、特に近世までなされていたけれども、近代以降はそのありようが少し変化をしてきており、特定の視点、特定の見方によって個々の要素で景観の切り取りをしていくようになったということです。こう迫ってみると、満濃池の価値を認識するためには、本来、周辺との繋がりのなかで大きな捉え方をしていた昔の人たちの認識の豊かさに触れて、「名勝」として満濃池を捉え直していく、あるいはその捉え方の参考にしていくとともに、これからも可能性としてみえてくるのではないかと思います。

さて、それでは 3 つ目の満濃池の捉え方です。(スライド 1-47)

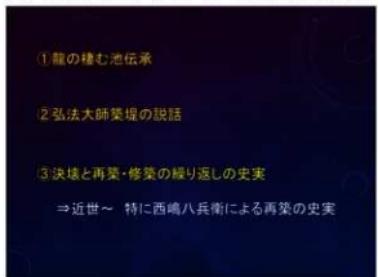
これまで挙げてきたのは、ある種、物理的にどう満濃池の風景を捉えてきたのか、価値付けてきたのかという話です。これから後は、そ



スライド 1-47

ではなくて、文化的・精神的な繋がりのなかでも満濃池を捉えていたということについてみていきます。その精神的な満濃池との繋がりも、多様に見てとることができます。大きく分けて、歴史的な価値付けと、社会的な価値付け、この二つの繋がりのなかで、満濃池は繰り返し語られてきたといえます。

ではまず、歴史的な価値のほうからみていきたいと思います。(スライド 1-48) 結論から申



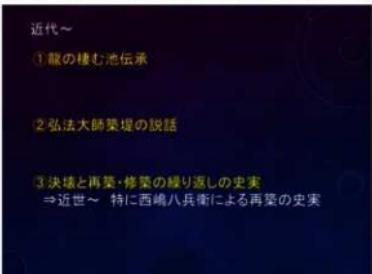
スライド 1-48

しますと、3つの歴史的価値が満濃池には付与されてきました。1つ目、こここの場所が持っているものすごいスケールの激しい水の力が、龍の棲む池という謂れと繋がっているのではないかという話をしましたが、まさにその「龍の棲む池伝承」は、古代から繰り返し、この満濃池の歴史を語る際に出てくるものです。

そして2つ目はお大師さんです。弘法大師築堤の説話を。

そして3つ目。特に近世以降はこの史実が上の2つとセットで、満濃池の謂れや歴史を語る際に登場し続けてきました。それは、決壊し、人が労苦と知恵を絞って再築・修築してきたという、その繰り返しの史実です。特に西嶋八兵衛による再築の史実が、丁寧かつ克明に記されることが多いです。

ではこれが、近代からはどのようになっていくのかということですが、近代以降の満濃池の案内を読むと、先ほど挙げた①～③の歴史的価値は変わらずに継承されています。(スライド 1-49)「龍の棲む池伝承」の謂れも引き続き語



スライド 1-49

られますし、お大師さんが造った、築いた堤ですよ、といった弘法大師との繋がりも引き続き語られています。それから3つ目の、決壊と再築・修築の繰り返しの史実も変わらず語られています。すなわち近世、近代を通じてずっと満濃池の歴史的価値として、いわば3点セットのような形で繰り返し語られています。そして、そのなかでも特に2番目のお大師さんとの繋がりが、とりわけ近代以降強くなって現在に継承されているといえます。

この変化に大きな影響を及ぼしたのが、昭和7(1932)年から9(1934)年にかけてなされた「空海誕生千百年祭」の記念事業です。(スライド 1-50)堰堤のすぐ近くにがあるので皆さんよくご存じだと思うのですが、堰堤から南西の岸のちょっと小高い丘の上に、お大師さんゆかり



スライド 1-50

の神野寺を再興するというものでした。そしてその境内に、満濃池の池面を俯瞰する大きな大師像を建立しました。併せて記念として、その光景を写真で撮影した絵葉書を多数発行しました。そもそも特に大師信仰が、土地柄からからして強く根付いている場所ですが、この記念事業を通じて強化されて現在に継承されていると推定できるかと思います。

さらにこの神野寺再興以降、基本、「ゆる抜き」の行事はこの神野寺に詣でて豊作祈願の神事を行うことからスタートするということや、有名な歌人の詠む「お大師さんの池」という表現が出てくる歌碑が、土地改良区によって堤防の上に建立されていることから、直接、間接色々な形でお大師さんとの繋がりを意識していく行為が繰り返されていくなかで、満濃池といえどお大師さん、という繋がりがとりわけ強くなり現在に継承されていると考えられます。

さて、では最後、4つ目の満濃池の捉え方です。(スライド 1-51)これは、もうひとつの精神的なつながり、地域における社会的な価値認識です。今お話しをした歴史的価値と共に、地域における社会的な価値も、時代を越えて語り継がれてきている大事な要素です。

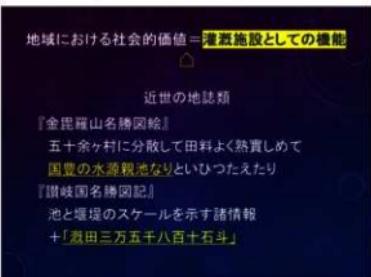
この社会的な価値は、遡ると、古代の「今昔物語集」に既に出てきています。築造して長い間崩れなかったので早魃の時でも多くの者がこの池のおかげで助かったんだ、といった内容



4. 社会的価値

スライド 1-51

が書かれています。今昔物語集というのはこれまでお話しましたように、満濃池のスケールに関しても書かれているし、歴史的な価値についても語られているのですが、加えてこのような記述がなされているわけです。すなわち、地域社会の中でいかに大事な場所なのかということについて、灌漑機能という満濃池の本質的な機能に照射した価値認識が既に古代からみられるわけです。こういう灌漑施設としての本来の機能に光を当てた記述内容は、この地に関する情報がたくさん出てくるようになった近世の地誌類において改めて明確に見てとることができます。ここで代表的なものを二つ挙げます。(金毘羅山名勝図絵・讃岐国名勝図会)(スライド 1-52)このように、いかにこの池が周辺

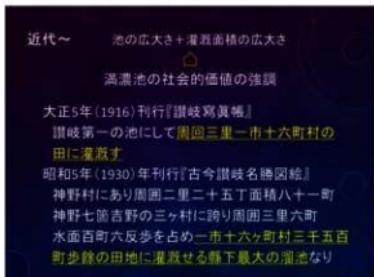


スライド 1-52

の田畠を潤すうえで大事な存在なのか、国を豊かにする大事な水源となっているのかが書かれています。さらにスケールの広さを示す池

と堰堤の数値に続けて、いかに灌漑施設として周辺の田んぼを潤しているのかに関する具体的な数値が並記されています。

このような社会的価値認識、つまり、物理的な池の広さのみならず、その池がいかに周辺の社会にとって大事な存在なのか、灌漑面積をどれほど広大に抱えている重要な水源なのかという事に関する記述は、近代以降さらに強調されていきます。例えば、大正5年に刊行された『讃岐寫真帖』に載せられている満濃池の写真は、先ほど紹介したように特定の要素に切り取られた構図なのですが、添えられている文章表現をみていくと、次のようなことが明記されています。讃岐第一の池にして、これだけの規模の田んぼを灌漑するものなのです。ただ大きいだけではなく、それだけ重要な灌漑施設として周辺の田んぼを潤す、地域社会にとって大事な繋がりのある存在なのですよ、ということです。(スライド 1-53)歴史的な価値づけのみな



スライド 1-53

らず、社会との繋がりのなかで、灌漑というその本質的な機能に一貫して目を向け、そこを満濃池の価値として大事にしてきている。その証左が古くは今昔物語集から近代に至るまで、繰り返しみられるわけです。

さらに昭和5(1930)年の「古今讃岐名勝図会」でも同様の表現が出てきます。これも具体的な数値で表されています。このような認識はその地域の人にとっては自明のことだと思うのです

が、これはものすごく大事で、灌漑施設ではなくなったら、満濃池というものをずっと捉え、支えてきた根底にある価値が失われてしまうのです。物理的にも、精神的にも、周囲をとりまく色々なモノ・コトとの繋がりのなかで、満濃池の価値は、古代から近代を経て現代に至るまで、繰り返し認識されてきたということがあります。

さて、ここで再び「ゆる抜き」について考えてみたいと思います。内包する水量の多さ、水勢の激しさに加えて、ここが周辺の広い田畠を潤す灌漑施設なのだということもまた、強く人々に認識させる重要な場として機能していると指摘できます。(スライド 1-54・55)こうい



大正3年(1914)以前の初かる後き (満濃池土地改良会議)

スライド 1-54



昭和5年(1930)ゆる抜きの際わい (満濃池土地改良会議)

スライド 1-55

った行事、共通体験・共有認識の場が近現代を通して継承され続けているということは、実は満濃池の持っている本質的な価値を継承させている重要な機会だと評価することができる

のではないかと思います。(スライド 1-56)



スライド 1-56

以上、駆け足ですが、ひと通りみてきました。主に、次の4つの価値付けというものが、満濃池に対してなされていたということでした。

1つ目はスケールの広さです。そのスケールの広さというのは、池面の広さプラス堰堤の高さ、そして内包する水量の多さと水勢の激しさ、これらによって複合的に捉えられていました。

2つ目は満濃池という存在を、そこで切り取るのではなくて周囲の自然環境との繋がりのなかで意識する、池のある場所を一つのまとまりのなかで捉えるという固有の立地環境に対する眼差しです。

3つ目が、龍の棲む池の伝承、弘法大師の説話、それから決壊と再築、修築の繰り返しの史実、この3点で捉えられる歴史的な価値です。

4つ目は、非常に広い範囲の田畠を潤す一大灌漑施設として機能していることに基づく、地域社会における価値です。

いずれもその源は古代に端を発しており、時を経るなかで次第に確立されていき、近世にはとりわけ明確に見てとることができます。以後、現代に至るまでこの4つ価値認識は、継承されていると一応はいえます。ただし近代以降、その内実には今日みてきた通り変化がみられ、薄れてきている要素もあります。このような薄れてきている部分をもう一度呼び覚ますという

ことは、実は伝統行事の継承など、地道な取り組みのなかで実現可能なことであり、何よりそのような豊かなまなざしが注がれる非常にボテンシャルに満ちた空間なんだよ満濃池は、ということを、皆さんに一番伝えたいところです。

さて、最後に一つ付け加えたいことがあります。「名勝」になったのでここの中場所を観光地としてもっと活性化しなきゃ、したいというような思いを抱かれている方もいらっしゃるのではないかと思います。特に最後の社会的価値に関することなのですが、満濃池が行楽地としての社会的な機能を有するようになったのはいつなのか。

資料を辿ると、少なくとも明確にそれが認識し得るのは「金毘羅山名勝団会」です。つまり近世後期です。では人は、ここで何をどのように楽しんでいたのかというその楽しみ方なのですが、よく見ると「……さればかゝる大池なれば 四季づねにながめ有て」とあります。いつもそこに来ると非常に素晴らしい眺めを見てとることができて、それを「池見」というふうに表現しているのです。その土地の人々が「池見」をしようと言って、お弁当を持って、朱の艶を敷いて、色々な音楽なども奏でながら楽しんでいたと。「まことに山水勝地風色の名池なり」と。その場所に訪れ、その眺めを時間をかけてじっくりと味わっていたということです。(スライド 1-57)

さらに「讃岐国名勝団会」、これは近世～近代と版を重ねているのですが、そのなかで明治に入って補筆された部分に、明治初頭の再築以降の人々の利用状況について書かれている内容があります。(スライド 1-58)「ここにおいて遠近の諸人、池遊覧せんとて、日ごとに弁当や剣籠を携えて、ここに来る者は絶え間なく、堤の上に、もうここで視点場、堤と確定していますが、そこで憩いじっくりご飯などを食べながらそこを愛でている、そういう潤いがある。

人々の行楽地としての機能

『金毘羅山名勝図会』文政～天保年間(1818～1844)
に記された満濃池の観光地認識

「…さればかゝる大池なれば 四季つねにながら有て
春の弥生は土人・池見とて小竹割子のものを携え
朱の鉢を戴たるさまは 山つじの色を奪い
糸竹の秘曲は山谷にこだまして
夕陽を限りて打ち連れ帰れる。
まことに山水勝地風色の名池なり」

スライド 1-57

人々の行楽地としての機能

明治に入って補筆された『讃岐国名勝図会』にみる
明治初頭の再興以降の人々の利用状況

「ここにおいて遠近の諸人、池遊観せんとて、
日ごとに弁当・割籠を携え、
ここにいたる者の絶え間なくしかば、
堤の上ニ桟敷・机木を設けて遊客を憩しめ、
酒肴菓を商う者もあり。
四時村民の潔いとなせるは、これも万民を救い給う
一助なるべし。」

四季折々の眺望を座して愛でる文化の定着

スライド 1-58

いつ来ても村民の潔いになると、これも万民を
救い給う一助なるべし。」と。万民を救い給う
社会的に非常に高い価値として、何よりも「灌
漑機能」というのがずっとあるわけですが、一方でここ固有の風景を愛でる、楽しむという行
為が近世後期には少なくとも明確に確立して
おり、近代以降も継承されていったわけです。

ただ、その楽しみ方をみると、何かプラスアル
ルファでそこに価値付けするのではなく、まさ
に池見をしている。池の風景そのものを、お弁
当などを携えて、長い時間をかけてじっくりと
味わっている、そこに楽しみを見出していると
いえます。見方を変えると、ここからは時間を
かけてじっくり見ることによって、色々な味わ
い方や、楽しみ方をし得るボテンシャルが、満
濃池にはあるのだということがいえるのではないかと思
います。四季折々の眺望を、座して
じっくりと時間をかけて愛でるという文化が、

この満濃池の行楽地、いわば観光地としての機
能を支え続けていた、そういう場所だと指摘す
ることができます。

このたび、満濃池は名勝になりました。名勝
になったということは、今の私たちの捉え方で
はなく、古くから色々な人たちがこの場所、こ
の風景に対して凄いな、良いなと思ってきたそ
の感覚、感性に、触れた上で、そういうボテン
シャルを持った場所をどう未来に受け継いで
いくのかを考える、スタートラインに立ったと
いうことを意味します。(スライド 1-59)

人々が古来、この風景のどこに、
どのように強く心動かされてきたのか



スライド 1-59

古来、満濃池に注がれてきた人々の価値認識
の一端を、今日はお話しさせていただきました。
満濃池は、ただ大きいだけの池ではなく、いか
に満濃池というのが色々な角度で人や周辺環
境との繋がりのなかで受けとめられてきたの
かということを、最初の基調講演としてお話
させていただきました。

これで本日の私の話を終わりにさせていた
だきます。ありがとうございました。

【司会】 井原先生、大変貴重な講演をありが
とうございました。これにて基調講演を終了いた
します。



まんのう町町民文化ホール



井原先生、講演の様子



第1部 基調講演の様子



第2部 パネルディスカッションの様子1



第2部 パネルディスカッションの様子2

第2部

パネルディスカッション
「未来につなぐ満濃池」

ッションを開催いたします。

「未来へつなぐ満濃池」をテーマに保存活用について、パネルディスカッションをおこないます。

パネリストを紹介します。

舞台中央より、香川大学名誉教授 増田拓朗様です。増田先生には、満濃池名勝地調査委員会の会長をしていただきました。

続きまして、先ほど基調講演をしていただきました、井原縁先生です。

続きまして、満濃池の管理を行っている満濃池土地改良区理事長 國重進様です。

続きまして、文化財の保護行政をしている文化庁文化財第二課名勝部門主任文化財調査官の平澤毅様です。

最後に、まんのう町長栗田隆義です。

コーディネーターを務めていただきますのは、香川県立ミュージアム主任文化財専門員の信里芳紀様です。

信里主任文化財専門員は、県の文化財課に在籍しておられた際に、満濃池の名勝指定において、文化庁との協議など大変ご尽力をいただきました。関係者とのつながりも深いかと思われますので、パネリストの皆様から、興味深いお話を引き出していただけるものと楽しみにしております。

それでは、信里さん、パネリストの皆様、よろしくお願ひします。

【信里】 第2部のパネルディスカッショ

ンを始めたいと思います。

皆さん受付で、非常に美しい満濃池が写っているパンフレットをいただいていると思いますが、パネルディスカッションの間、そのパンフレットの写真などを合わせて見ていただきながら、1時間ぐらいの予定で、お付き合いをいただければと思います。

まず、記念講演で井原先生の方から、これまで満濃池がどうやって人々の心を動かし掴んできたのか、また、満濃池の風景というが、どのようなものから構成されているのかという総括的なお話ををしていただきました。パネルディスカッションでは、「未来につなぐ満濃池」と題して、満濃池を将来に伝えていくというのが大きなテーマということになっています。

本格的な論議を開始するためには、いくつかの準備作業が必要になります。

まず、名勝とは、国土を代表する美しい風景が今もなお存在しているということが前提条件になっています。また、絵画などの美術工芸品と異なり、風景の見方、捉え方は、時代によって変化する、いわば「生きもの」であることを意識する必要があります。

つまり、過去を踏まえつつ、今の私たちが満濃池の風景に対してどのような見方、捉え方をしているのかを知ることを出発点として、未来へつないでいくために何をすべきかを考えることが求められるのです。

そこで、パネルディスカッションの口火を切るために、地元を代表して、栗田町長さんの方から少し満濃池に対する思いを語っていただきスタートにしたいと思います。それでは町長さん、よろしくお願ひいたします。

【町長】 満濃池はやはり、私自身まんのう町で生まれ、育ってまいりましたので、子供のときから満濃池には親しんでまいりました。確かに小学校6年時の社会科の教科書にも日本一の灌漑用ため池ということで、満濃池が写真入りで

載っていたことを、非常に誇らしく思ったこともありますし、小さい時から、私も農家の息子でしたから、よく親父のオートバイの後ろに乗せられて満濃池のゆる抜きを見に行きました。「満濃のゆる抜き、ドーンと抜け」ということでした。その当時、私の小さい頃でしたからもう50年以上も前ですが、そのころのゆる抜きといいますと、池の堤防に屋台が一杯出て非常に賑わいを見せていたなということを子供心に覚えています。また、小学校の遠足すると必ず満濃池に行っていたなあということを覚えています。

満濃池は香川県の西部を流れる金倉川の上流に位置し、古代以来、巨大な堰堤の構築によって形成された広大なため池で、地域の地勢や遙かに遠望する山並みとともに優れた風致景観を呈するとともに、近世から近代にかけて広く親しまれてきた名所であり、平成28年には世界かんがい施設遺産にも認定されました。

そして、香川の歴史を振り返ってみると、香川では古より旱魃等の被害に悩まされ、水との闘いであったと言われています。このため、先人たちの多くはたくさんのため池と水路網を構築して農業用水を確保してきました。その中でも特に満濃池は弘法大師空海が中で学んできた土木技術を駆使して、非常に短期間で修築をしたということで有名です。

そして、先ほどの井原先生の話の中にもありましたように、古くは今昔物語の中にもこの満濃池が登場します。海と見間違うほどの大きな池であって多くの地域の水田が恩恵を受けており、人々の喜びは限りないものであると語られています。

満濃池は讃岐の水瓶といわれています。しかしながら、水瓶という水源地の意味だけではなく、水の少ない香川県で暮らす人々が長い年月と知恵や苦労をかけて造り上げてきたため池の象徴もあります。また、人と自然の共生の

象徴としても古くから親しまれてきたと思っています。そして、その水を湛えたその姿は雄大なものがありますし、周辺の水面に映る広大な山並みをはじめ、美しく豊かな自然が広がっており、日本の優れた国土美の一つだと私は思っています。

「水ならで慈悲の心を湛えたり大師の池はありかたきかも」と歌人の吉井勇先生が歌われたように、現在でも満濃池は満々と水を湛えて人々に多くの恵みと潤いを与えてくれています。まんのう町にとりましては貴重な財産だと思っております。

【信里ゴーリー】 私も香川の生まれですので、満濃池というのは、心のなかに当たり前のようになんでいました。弘法大師をはじめ、満濃池の歴史というのは小学校でも習うし、遠足などで必ず訪れていました。地元の人々にとって満濃池は「何気ない」「あたり前の」風景であるといえますが、誰もが思い浮かべることができるということは香川の「心の風景」ともいえるのではないかでしょうか。

町長さんの話にありましたが、やはり満濃池は「ため池」として伝えられてきたからこそ、今も美しい風致景観があるのです。次に、これまで満濃池の維持管理にご尽力された國重理事長さんからも満濃池に対する思いを話していただきます。

【理事長】 満濃池は1300年の歴史があります。遠く西暦701年に道守朝臣という国司が創築したのが始まりです。始まって以来、何回か決壊し、そして118年後に決壊した時に初めてあの有名な弘法大師空海が修築したわけです。これで満濃池が一躍有名になったと思います。

その後、戦国時代を経て徳川時代に入り、政権がある程度安定した3代将軍家光の時代に、西嶋八兵衛という人によって再構築されました。これを通り450年ほど昔から満濃池は決

壊したままになっていて、満濃池の中に池内村という村ができるほどになっていたところを、この西鶴八兵衛が満濃池の修築に掛かりました。地元の協力を得てできあがった満濃池は貯水容量約580万m³余りの池となりました。その後も明治の始めに至るまで決壊は何回なく起きました。昔は底樋(ゆるを抜く穴)が木製でしたが、石樋(石でつくった樋)に変わりましたが、安政の大地震によってずれて、満濃池そのものが決壊したというのが、最終の決壊の歴史です。これを修築したのが、和泉虎太郎、また長谷川佐太郎翁といった方々で、先人の苦労が実り、今の満濃池になっています。

満濃池は今までに3回嵩上げしました。最後の第三次嵩上げが昭和14年から始まって、昭和34年に完成しました。この間に戦争等があり、長引いたわけですが、できあがった器は大きくなつたものの、水を貯めることについては、非常に苦労をしました。満濃池から東へ約1kmの地点辺りに1級河川土器川が流れていますが、その上流に天川という地点があります。そこから4,600mの隧道、また開水路をもって、満濃池に通すようになりました。水を取ることについては地元旧琴南町の皆さん、そしてまた土器川右岸土地改良区連合の皆さんのご協力を得て、今、満濃池を満水にするような状態ができました。

こういった経緯をもって満濃池の配水が十分できるようになったわけですが、取水に今、一番苦労しています。満濃池は台風時でなければ貯めることができません。そこで台風待ちですが、一昨年に長雨、また台風等があり、その時に満水状態が続いて以来、最大で70%程度の貯水量が続いている。昨年の台風では80%まで回復しましたが、やはり一日に約17,000tの上水、そしてまた田に供給する水等で今現在は70%程度の嵩しかありません。

できるだけ水を貯めていくことが、私たち満

濃池土地改良区の役目だと思い続けています。そして名勝指定について、私ども満濃池土地改良区としては、今までの施設、周囲の景観をいかに保つかということが使命だと思っています。できるだけ周囲の開発等は防いでいきたいと思いますが、それも修繕等があり、なかなか難しいことだと思います。これから満濃池の管理等については、できるだけきれいな水を貯めていくということが私たちの使命であると思っています。

【信里】古代の築造以来の満濃池のはるかな歴史を引き継いで池の管理に万全を尽くされているという話でした。

今までの町長さんと理事長さんの話では、満濃池がもつ歴史性の部分を大きく取り上げられていました。

満濃池が千年を超える歴史をもつことは事実で広く知られているわけですが、今回の指定は「名勝」として評価されました。皆さん、「名勝」とは何か、詳しく説明できる方はいらっしゃいますか。実は私も、満濃池の名勝指定に関わるまで、「名勝」とは何か、名勝とは何をもって評価するのか、頭のなかで非常にぼんやりとしたものをもっていました。そこで、名勝とは何かということを、文化庁の平澤さんにお話しいただきましょう。

【平澤】では、できるだけ簡単に説明したいと思います。名勝というのは優れた風景を示す言葉ですが、一方で制度の名前もあります。史跡、名勝、天然記念物の保存を図る制度が1919年、100年前に作られて以来、続いているものです。名勝という言葉は相当古くからあります。今ある名勝のイメージは、今、418件の指定物件の全体のイメージで理解できると思います。そこにどういうものが含まれるのかについては、文化財保護法の第2条に、「庭園、橋梁、峡谷、海浜、山岳その他の名勝地で

我が国にとって芸術上又は観賞上価値の高いもの」(スライド2-1)とあります。こういうも

■名勝(名勝地)とは

文化財保護法第2条第1項第4号(記念物)から

**庭園、橋梁、峡谷、海浜、山岳
その他の名勝地で我が国にとって
芸術上又は観賞上価値の高いもの**

→文化財保護法第109条 名勝

→文化財保護法第132条 登録記念物(名勝地)

スライド2-1

の中から重要なものを指定していくこうというの、冒頭、松下課長がお話しされたことです。文化財保護法ではこういうものの中で重要なものを109条に基づいて名勝に指定する制度と、それから132条に基づく登録という制度もあります。

名勝に指定するには、その基準(スライド2-2)というものがあります。基準の内容に相当す

名勝の指定基準

昭和29年(1954)1月10日、文部省保護委員会告示第2号

次に掲げるもののうち、わが国の優れた国土美として
全く我が國の優れた国土美として、その自然的なもの
においては、風致景観の優秀なもの、名所のあるいは
学術的価値の高いもの、人文的なものにおいては、芸
術的あるいは史蹟的価値の高いもの

1. 公園、庭園
2. 橋梁、築堤
3. 花園、花壇、紅葉、緑樹などの生長する場所
4. 鳥獸、魚虫などの棲息する場所
5. 岩石、洞穴
6. 峡谷、瀑布、渓流、瀧淵
7. 湖沼、瀑布、洋島、遙景
8. 砂丘、砂嘴、海浜、島嶼
9. 火山、温泉
10. 山岳、丘陵、高原、平原、河川
11. 風景地

スライド2-2

るのはこの最初に書いてある文章ですけれども、どういったものを対象にするのかというのをもう少し細かく書いたのがこの11項目になります。満濃池は2番目と11番目の項目で特に優秀であるということで指定されています。指定物件は、この指定基準の言葉を借りれば、「我が国の優れた国土美として全く我が國の優れた国土美として、その自然的なものにおいては、風致景観の優秀なもの、名所のあるいは学術的価値の高いもの、人文的なものにおいては、芸術的あるいは史蹟的価値の高いもの」であるという認識です。自然的な

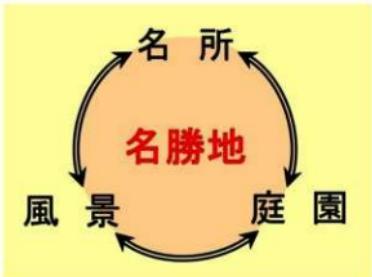
ものについては風致景観の優秀なもの、名所のあるいは学術的価値の高いもの、人文的なものにおいては芸術的あるいは学術的価値の高いものということです。一般に1番、2番のような公園、庭園とか橋梁、築堤というのは相当程度人が手を加えて造る部分があるので、これを人文的なもの、3番から11番が主な指定の理由になるようなものを自然的なものと便宜的に言っています。今申し上げたように、満濃池は2番と11番ですので人文的なものであると同時に自然的なものであるということになります。

実際に指定物件418件のうち半分くらいが庭園であるということが100年の成果の一つの特徴です。名勝地というのは、例えば観光名所のような場所であるとか、佳い風景がある場所、あるいは、庭園で、代表的にはこういう3つのものを思い巡らせて、そういう中に「名勝地」という概念があります。これは人々が名所を巡って、そこで素晴らしい風景だと感じてそれを庭園に取り込んだり、ある風景を感じてもともと名所でなかったところが有名になっていく、名所化していくことなどです。逆に日本の庭園は千年以上の歴史がありますから、庭園で過ごしていた印象をもって、いろいろなところを訪ねてそこに風景を感じたり、といったようによく名所と風景と庭園が相互に関係しているというのが日本の風景の名勝地の概念を考える上で非常に重要です。(スライド2-3)

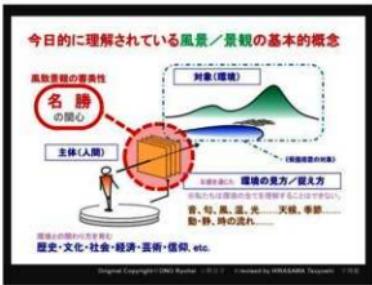
文化財としては庭園、橋梁、峡谷、海浜、山岳、その他の名勝地を対象にしているのですが、ここでは「風景」に代表させて考えてみたいと思います。

私たちがある風景を見るときにこういう構図があります。(スライド2-4)

環境があり、そこを眺めるという行為がありますけれども、実は私たちは環境にある情報をすべて理解した上でその場所を評価するわけ



スライド 2-3



スライド 2-4

ではありません。基本的には五感であったり、その他情報が予めあって、構図でいうとフィルターみたいなものがありますけれども、こういうものを通じてこの場所がどういう場所であるか理解するわけです。そこには実は視覚的なものだけではなくて音とか匂いとか風とか温かかったり、光がさしたり、一日の中でも日の明かりが違うし、天候が変わればまた違うと。季節も変わるし、見ている風景の中でもほとんど動いてないものと、動いているものが同時に見えたりとか、そこで時を過ごしたりとか、いろいろなことが影響してその風景を見ます。そういうことは私たちの中に育てられた歴史とか文化とか、いろいろな事情が影響して私たちが環境に意味を感じます。

庭園、橋梁、峡谷、海浜、山岳、こういうものが名勝だと認識しがちですが、実は、保護の対象は今回の満濃池のように土地を区域とし

て法律は取り扱いますが、名勝の関心は、私たちが環境とどういうふうに関係しているかということに向けられます。環境も変わっていきますが、私たちもどんどん変わっていくわけです。ここで重要なのは、名勝というの、例えば満濃池でいうと、弘法大師が修築したような時代を保存するといったようなことではなく、まさに今生きている、いわば名勝と私たちがどういう付き合いをしていくか、そういうことが非常に重要であり、求められる文化財です。

【信里コーディネーター】 平澤さんのお話では、「名勝」とはある場所（自然や庭園）を人が眺めたり、観たりして思いを巡らす、または評価するということですね。その際には、その場所の歴史や目に映る景色、風のにおいなど、知識や五感をつかって感じ取るようなことでしょうか。ただし、五感のようなものは時間の経過とともに絶え間なく変化していくので、法律で「名勝」として保護する際には土地を指定します。土地に関わる文化財を私は「不動産文化財」といいますが、法律では「記念物」と呼んでいます。

土地に関する文化財の「記念物」には何があるかというと、史跡（遺跡）、名勝（庭園、風景地）、天然記念物（地質、鉱物、植物）があります。最初の町長さんのお話や理事長さんのお話を聞くと、満濃池には記念物の中で「史跡」の要素があって、井原さんの講演では固有の立地環境、後ろの讃岐山脈とか周辺の丘陵とか、地形や地質などの「天然記念物」の要素である固有の立地環境を舞台として風景が観賞され続けているということでした。

お国自慢ではないですが、満濃池は、名勝でありながら史跡の「歴史性」と天然記念物の「環境性」をあわせもつ、記念物の中では教科書的な「スーパー記念物」のような気がします。

平澤さん、名勝としての満濃池の特徴について詳しくお話しいただけますか。

【平澤】 満濃池の名勝としての特徴に触れた

いと思います。名勝は常に今生きている人たちとその環境との間にあります。つまり、私たちがそれを別に何でもないことと思っていくと名勝としての実態が無くなるとも言えます。私が最近言っているのは、観賞行為を続けること、その付き合いを続けなくなったものについては、名勝としての存在意義がなくなることがあります。ですから、それを育んでいく、育むということで、子育てとの比喩でいえば、子供は成長することにどんどん変わり、私たちも子供との関係が変わっていき、しかし、その子はその子として、人は人として、人付き合いもそうですが、その人として認識していく中で、ああ、そんなこともあったんだとか、いろいろなことを新しく発見して、さらにその付き合いが深まってくるということがあります。だから、名勝との付き合いというのもそういうふうに考えて理解いただけるとよいのではないかと思います。

もう一つ、信里さんから、満濃池はスーパー記念物であるという話がありましたが、満濃池を思うとき、重要なのは、単に自然の風景との付き合いというのとちょっと違うんですね。これは 418 件名勝指定されているうちの半分以上を占める庭園は芸術的に造っていくというものですが、この満濃池が指定されている指定事由に適用されている 2 番というのが「橋梁、築堤」という指定基準になります。実は今まで 100 年の中での「橋梁」に該当するものは 2 件しか指定していませんでした。今回「築堤」という指定基準を初めて適用した事例になります。例えば、橋梁 2 件というのは、山口県岩国市にある錦帯橋と山梨県大月市にある猿橋です。それは特徴的な橋が自然の風景に架かることによって、いわば自然の風景に人工物を加えることによって新たな内容が加わったものです。

満濃池も人工物を加えているという点では

同じですが、堰堤を設けることで池が構成されます。今まで池ができる以前の地形がありますが、これが池となることで新しい風景の構成内容が現出しているという意味で、要は池全部を人間が作った物ではないわけですが、堰堤を一つ加えるだけで違う風景構成が現出しているというところも、名勝としての満濃池の他には見られない非常に重要な特性だと思います。

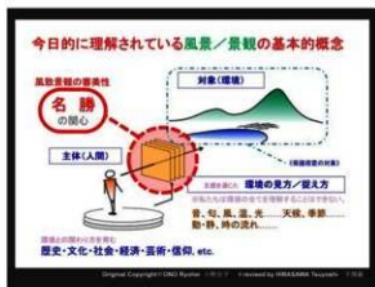
【信里ヨーナ】 人文的なため池、人間が造ったものと自然的な風景が複合している状態が、他の名勝にあまりみられない満濃池の重要な特性ということですね。

名勝とは何か、名勝としての満濃池の特徴について、詳しく整理していただきましたので、ここからはテーマの「未来につなぐ満濃池」へ進めていこうと思います。満濃池の風景の捉え方としてここまで話で、満濃池の風景特性は、豊かな歴史をもつ「大きな池」が水源となる後の讃岐山脈や周囲の丘陵などの固有の立地環境も含めて観賞することにあるということでした。

また、名勝のように、風景を捉える概念として「ランドスケープ」があります。「ランドスケープ」とは、単純な「見ばえ」や視角的範囲だけではなく、感性や文化的なまとまりを想起させるものです。

これまでのお話を受けて、私は満濃池は、名勝に加えてランドスケープという言葉が非常に似合うと思いました。今回の名勝の指定はランドスケープの中で中心となるコアな部分ではないか。でも、やはり井原さんの話を聞くと、満濃池の風景はランドスケープがもつようなもっと広い構図で捉えた方がよいのではないかと思いました。井原さんはランドスケープ学がご専門ですので、その点も含めてコメントいただけますか。

【井原】 先ほどの平澤さんのスライド、これがすべてかと思います。(スライド 2-5)



スライド 2-5

ランドスケープという概念は土地、自然と人との関わりの中で環境を捉えるという見方です。対象の環境にだけコミットするのではなく、まさにその間に「名勝の関心」と表示されている部分、名勝の「核心」と言い換えててもよいと思いますが、この捉え方を考えていくというのがランドスケープの基本であると思います。

先ほど信里さんがおっしゃったとおり、満濃池に対しては名勝として保護措置が取られますが、実際に指定範囲としているのは、あくまでコアの部分だけなのです。ただ、ランドスケープとしての名勝の核心は何かというと、古から人々が満濃池という環境をどう見てきたのか、捉えてきたのか、というのをヒントにしながら、今の、そしてこれから私たちと満濃池という環境との関わりを考えていくということになり、そこで捉えられる対象というのは、限られたコアゾーンではなくて、もっと固定環境を含む範囲の広いものであると考えます。コアの部分の価値に非常に影響を及ぼし、満濃池を捉える私たちの見方の一番の核心に触れるようなバッファー（緩衝）ゾーンは広いと考えます。

満濃池を名勝として保護するにあたってはコアの部分にどう手を入れるのかということだけではなく、むしろ大事なのは、その周りのバッファーをどのように設定し、そことの繋がりをどういうふうに作り出していくのか、ある

いは魅らせていくのか、という観点が非常に大事なのかなと思います。そのような繋がりのなかで満濃池そのものをどう味わい尽くすのか、そこが一番大事なポイントになってくるのかなと思います。

【信里ヨウタ】 井原さんにもう少しお聞きします。近年、「景観法」が制定されるなど、景観に対する意識の高まりがみられます。高度経済成長期にランドスケープは意識されることはずなかつたと思います。

井原さんからみて、ランドスケープが今社会の中で果たす役割といいますか、名勝として指定された満濃池をコアに捉えて、自然と人との関わりの中で環境を考えていく意義についてお聞かせください。

【井原】 非常に根源的な質問なので、限られた時間の中でどのくらいお答えできるか悩ましいところですが。

先ほどランドスケープの見方について話しましたが、人とそれを取り巻く環境との繋がりは、本来人間の持っている身体感覚というか、環境に向き合う上での人間の可能性みたいなものを、より豊かにするという必要にどこか駆られているところがあるのではないかと思うのです。

もっと人間は環境に対して、豊かな感性や捉え方ができていたにもかかわらず、それが失われつつある。何か危険なのではないかという、本質的なところのある種の危機感のもとにランドスケープという表現が広がってきてているのではないか、何か豊かさに対する欲求というようなものが根底にあるような気がします。

ですから、足りないから何かを足すというよりも、本来あるはずの潜在力を味わい尽くすというか、そこの場所の可能性をどれだけ掘り下げていけるのかということが大事だと思うのです。

ランドスケープの視座からすると、満濃池に

ついて、まだまだ私たちは十分味わい尽くしていない、その味わい方をどう考えていくか、ということです。

【信里】かつて人々は、個々の風景に対して豊かな感性をもっていたかもしれないし、今の私たちは一端失ってしまったのかかもしれない。いや、その風景のもつ潜在力に気づいていないのかもしれない。豊かな感性を磨き、考えていくことが満濃池を未来へつないでいくことに結び付くような気がします。

ここからは、では具体的にどうすればよいのかについて話をすすめます。

続きまして増田さんにお聞きしたいと思います。環境緑化工学を専門に研究されていまして、ランドスケープの保存、都市計画などの多種多様な計画策定に関わっていらっしゃいます。満濃池を将来へ残していくためにどのようにしたらよいのか、ご意見をいただきたいと思います。

【増田】植生管理、あるいはランドスケープという話がありましたが、景観ですね、特に植生景観、どんな植物が生えているのか、どう見えるか、といったことを担当しましたので、その点からお話ししたいと思います。

第1部の井原先生の話の中で出てきましたが、江戸時代から明治時代の絵図を見るとだいたいマツ林ですね。そこにサクラがあつたりツツジがあつたりと、そういう景観を楽しみに人々が来たと。実は昭和にかけてもずっと同じような景色だったのではないかと思います。私は40年前に香川大学農学部に助手で来まして、そのころ満濃池を案内していただきまして、秋だったので、池の縁にロープが張ってあつたのですが、中に入りたいなと思いまして跨いで中に入りましたら、案内していただいた方にバッタと手を掴まれ引きずり出されまして、「先生、マツタケ泥棒で捕まるぞ。」と、こう言われまして、年配の方だったらわかるだろうと思

いますが、たぶんマツタケの出た山であったのだろうと思います。そういう満濃池周辺の植生といいますか、植物がどうなっているか、今後に向けてどう管理したら良いかということを少しお話したいと思います。

これが現在の姿です。(スライド 2-6)堰堤か



スライド 2-6

ら見たところ、北岸の方です。まだマツが残っています。町の方がマツクイムシの防除をしているので残されていると思います。水面にマツが映えて良い風景だなと思うのですが、だんだん広葉樹が入ってきています。

東部の方へ行きますとマツの姿がなくなつて広葉樹、あるいは落葉広葉樹、クスノキとかアラカシとか、常緑広葉樹ですね、金比羅山でよくみられるようなそういった山になってきつつあるということです。(スライド 2-7)



スライド 2-7

これは国営公園の展望台から見たところです。こちらが堰堤で象頭山も見えます。マツが

ちょこちょこありますが、ほとんどもう姿を消しています。(スライド 2-8)



北岸中部、国営公園展望台から (2018. 02. 14)

スライド 2-8

これはここに限ったことではなく、日本中で



す。(スライド 2-9) 香川県では屋島にしても栗

スライド 2-9

林公園の裏の紫雲山にしても、かつてマツ林だったところがほとんど消えています。これはマツクイムシの影響もありますが、自然のマツ林は人が手を入れなければ、マツ林からだんだんと落葉広葉樹になり、この辺りでは常緑広葉樹、クスノキ、シイ、カシに移っていくということです。良い悪いではなく、今までずっとマツ林できたのは、人々がマツ林として下草を切り、落ち葉かきをし、マツ林として維持してきたからです。そこに燃料革命があり、人が入らなくなりました。そうするともう良い悪いではなく、こういう状況であるということです。

一部、対岸から見たところですが、国営公園の端ですが、アカマツが残っています。(スラ



国営公園 アカマツの森 (2018. 02. 14)

イド 2-10)なぜここに残っているかというと、

スライド 2-10

国営公園が下草を刈って樹幹注入でマツクイムシの防除をしているからです。光が入るようにしてやれば、マツ林は再生できるわけですが、こういうことができなければ、今あるマツが枯れて広葉樹林に移っていくということです。植生観はこういう動きをしているとご理解ください。

これはドローンで撮った写真ですが、満濃池の流入口、東南方向から見ています。(スライド 2-11)右が国営公園、左が南岸になります。



上流側から見る

(ドローン撮像 2017. 11. 20)

スライド 2-11

11月末に撮りまして、ほとんど落葉広葉樹、一部が常緑樹でマツがごく僅かしかない状態です。こういう植生になってきているということです。良い悪いではなく、こういうふうに動いているということを理解してください。

それからここを歩いていますと、3千本のサクラの植樹をされていて、かつてはサクラも見

えるということで賑わった所ですから良いことだと思うのですが、残念ながら一部では植えても他の広葉樹に負けてしまって、ちゃんと育たないという所もあります。(スライド 2-12)



南岸西部、半島部歩道 (2018. 01. 26)

スライド 2-12

ですから、マツを残したいのであればマツが残るような管理をしてやらなければなりません。サクラも見たいのであれば植えたサクラがちゃんと育つような環境整備をしてやる必要があるだろうと思います。手を付けられないとすれば、だんだん落葉広葉樹から常緑広葉樹に移っていくと、そういう姿ですということも理解しながら今後の植生管理をやっていく必要があると思います。



南岸東部 (2018. 01. 26)

もう一つは竹林の拡大です。(スライド 2-13)

スライド 2-13

これはもう全国で大問題です。ちゃんと竹林として管理すればよいのですが、放置するとどんどん拡大していきます。満濃池の周辺では、東南の方で一部見られます。竹林がだんだん拡大

していき、ササもありますが、こういう所の景観はこれでいいのかというような、難しいですが、自然に任せる、あるいは人間が放置するところなっていく、ということを考えながら、今後の管理計画を考えていく必要があると思います。

それから一部、特に東部の方ですが、岸辺が粘土層の所がかなり浸食を受けて、池の中に崩れ落ちている所がありますが、こういうことも管理上考えていく必要があるかと思います。(スライド 2-14)



南岸東部 (2018. 02. 14)

スライド 2-14

それからさっきから出てますが周辺を広く捉え、ランドスケープを考えるということです。

満濃 (背景) (2018. 01. 26)



(スライド 2-15)これは堰堤から見た景色です。

スライド 2-15

名勝の指定としては池の淵の植生だけになると思いますが、背後の山々の姿、まさに水源の森、という所まで含めて考えていく必要があると思います。

このような視点から我々は見ることはでき

ませんが、ひょっとしたら空飛ぶ車ができたら見ることができるかもしれません、まさにこの満濃池と周辺の環境を一体的に考えていく



必要があると思います。(スライド 2-16)

スライド 2-16

もう一つは、保存・活用ということをよく言われていますが、今、各文化財は保存活用計画を立てろという話が出ています。(スライド 2-

文化財の保存活用計画の策定

- 平成30年4月、文化財保護法改正
 - 過疎化、少子高齢化に伴う社会情勢の変化
 - 文化財保護にも影響（管理不備、毀損、・・・）
 - 地域において文化財の総合的な保存・活用を図ることが必要

- 都道府県 : 文化財保存活用大綱
- 市町村 : 文化財保存活用地域計画
- 所有者・管理団体 : 個別文化財の保存活用計画

- 国のもつ現状変更等の許可権限を当該文化財の所在する都道府県または市町村に移譲する。

17) 文化財保護法の改正が 2 年前にありました。

スライド 2-17

その中で、少子高齢化で社会情勢が変わってきて、文化財の保存、保護も非常に難しくなってきているため、地域全体で考えましょうということになりました。都道府県は大綱を作り、市町村は地域計画を作て個々の文化財について、管理団体、管理者が保存活用計画を作りましょうということになりました。

何が良いのか、なぜ作らなければいけないの

かということです。(スライド 2-18)特に名勝など指定地域が広い、いろいろな土地利用があ

・史跡、名勝の場合、一般に、指定地域が広範囲であり、市街地、山林、農地など、土地利用も多様で、現に、生活や産業等が行われている場合が多い。

・軽微なものから重大なものまで、多様な現状変更等が多く発生しうる。

○保存活用計画を作成することによって、当該文化財の価値、保存・活用に対する理解を広め、深める。

○保存活用計画の中で、あらかじめ、現状変更等を特定して記載しておくことにより、保存活用事業を円滑に行うことができる。

スライド 2-18

る、実際に人々がそこで生活をしている場合、そこを管理していくときにここをを変えたいとか、道をつけるとか、木を切るような話も出てくると思いますが、基本的に言うと全部、現状変更といって国に届け出て許可を得て進めないといけません。今までではそうでした。

地元で保存活用計画を作つて先に文化庁に認めておいてもらうと、その権限が県とか市町に移譲されます。ですから円滑に進むようになります。保存活用計画を関係者の皆さんや地元の皆さんが集まって作り、それを皆さんに知らせると、そうすると文化財に対する価値を理解してもらえるし、保存活用に関して協力していただけるということです。こういったことで、保存活用計画を作るということが必要かなと思います。

【信里ヨウジ】 風景を維持するため植生やため池の管理など様々な課題を調査し、対応方針や計画を定めていく必要があり、それが「保存活用計画」ということになるのですね。の中でも植生やため池の管理は重要な要素となってくるのではないかということです。当然ながら「満濃池」であるためには、ため池の機能をどのように維持するのかが大変重要になります。

次は國重理事長さんに、満濃池土地改良区の満濃池を未来に伝えていく思いについてお聞

かせいただきたいと思います。

【理事長】 満濃池は昭和34年に大規模な改良がなされて、堰堤は現在の高さになり、現在の約1,540万tの水を湛えることができるようになりました。満濃池の景色には水がなければもう名勝としての価値がないと思いますので、この水をいかに湛えたまま伝えていくかを考え、水を湛えていくことを一番に努めていきたいと思います。

施設の管理については地元まんのう町と相談しながら進めています。

植栽については桜の植樹を3千本しようという活動をしてきました。植える場所については植えたときは良かったんです。ところが周囲の木の誇り具合が早かったということで、桜が負けたところもあります。今後は良い所を選んで植樹するということで、春には3千本の桜が咲いて見頃の場所となるのではないかと思います。今、まんのう町の方で周遊道路、遊歩道が計画されています。こういったところを皆さんにジョギングやウォーキングしていただいて、憩いの場になっていくよう努力していくと思います。

【信里】 未来へ残していくためには、管理も重要ですが國重理事長さんのいう「憩いの場」や、井原さんの「美しい満濃池を味わい尽くす」、つまり、どのように活用するのかということも大事な視点となってきます。

平澤さんは全国各地の名勝の活用など、いろいろな部分に携わっていらっしゃいますので、満濃池の活用を進めていくにあたりご意見をお願いします。

【平澤】 名勝の基本というのは、そこで過ごして、外から来た人であれば「ああ来てよかったですなあ」とか、住んでいる人であれば、風景は普段常に意識しているものではないですが、うれしいときとか悲しいときとか人生の様々な場面に寄り添ってくれる場合があると思います

す。そういう経験が皆さんあると思います。基本はそこで過ごして、「ああいいなあ」とか、悲しいときもそこで過ごして気を取り直すとかいったことがあると思います。例えば、今回のように、文化財保護法で名勝に指定されると、これは「我が国の優れた国土美として欠くことができない」ということになっているわけですが、一方では地域の方で全国民に対してある意味での責務を負ったという部分もあります。ですからいろんな施策を展開するなどということがあると思いますので、他の事例を3つ紹介したいと思います。

例えば群馬県吾妻峠（よつねとうげ）という名勝があります。八ヶ岳ダムが上流に建設されることになっています。半世紀来、議論とか調整をしてきた結果、もう直ぐに出来上るわけですが、それを契機に吾妻峠の保護をどうしているかが考えられました。いまでは吾妻峠があってそこに人が訪れますよと、それだけのものだったわけです。こういう事業を一つの契機として、周遊ルートをどういうふうに整備するかなど考えられています。

長野県の飯田市にある天龍峡は、その近傍で道路の建設があり、いわゆる高速道路ができるというところで、そこにインターチェンジ、サービスエリアを造って、そこからアプローチしてもらうとか、その他「天龍峡100年」というプロジェクトを飯田市でやっています。ここでは周遊ルートの整備もいますが、併せてガイダンス施設を造ったりとか、植生の管理ということで、特に竹林が繁茂しているので、かなり除去したりしています。

それから今進めているもので、宮城県にある特別名勝の松島ですが、特に東松島市の奥松島と呼ばれる区域は、東日本大震災で津波の被害を受けていました。そこの大浜という、海岸から谷戸が入り込んでいる所があって、そこの農地再生のときに全部再生農地にされると奥松

島の自然の特性が見失われるというので、積極的な意味で湿地として再生をするという事業もやっています。

こういう場合、單に元に戻せばいいのかといふ話ではありませんので、今度、満濃池でどうしたらいいのかというときにも、これから考えていく必要があると思います。

大事なのはこういった文化財保護の活動を通じて、地域の将来というのをどう描くかということだと思います。文化財の保護は過去のためにやるわけではなく、将来のためにやるわけですから、まずもってそれが本当に地域の将来のためになるのかという問いは、常に持ちながらやっていくことが大事だと思います。そのきっかけとしては、満濃池は何がどうと、もっと皆さんの目で、私の満濃池はこんな感じだよとか、たくさん的人が関わっていくという、その中で、先生方には調査研究報告書をまとめていただきましたが、そこでも意外に見切れていない満濃池の姿や良さがたくさんあると思います。風景というのはずっと同じ状態にない、これは風景の特徴です。一日一刻として同じ状態はありません。変わっていくのですが、毎年季節が変わる中での繰り返しを感じられるものがあり、また変わっていくものもあります。そういう中で、日々々々、満濃池の姿はどうなっているのだろうと気にしてたりすることが大切だと思います。

今回、名勝指定という一つ特定された目印が付きましたから、だったらここで名勝としてだけではなく環境教育のこともやってみようとか、いろんなアイデアがあると思います。名勝というのは基本、象頭山などもそうですが、非常に観光と結びつきが強いということがあり、名勝の本質に人が訪れて観賞するというのは欠くことができないわけですが、人が来れば良いという話ではなく、まず地域の人がここに住んでいて良かったと思えるような取り組みが

一体何であるかという発想でやっていただくと良いのではないかと思います。

【信里ヨーテ】 もう少し満濃池の価値の発見ができるのではないかという話でした。「満濃池百景」の選定を是非やりたいですね。夢はどんどん膨らんでいきますが、終了の時間が近づいています。

最後にパネリストの皆様からいろいろなご意見がありましたので、これから満濃池に対する取り組みや抱負、今日の感想について栗田町長さんにお願いしたいと思います。

【町長】 パネリストの皆様には貴重な提言、ご意見等をいただきありがとうございました。

現在、まんのう町では、満濃池の北東には国営公園がありますし、南西には全国植樹祭、育樹祭を行いました香川県満濃池森林公園があります。堰堤周辺には町が経営する交流施設「かりん会館」やうどん店の「かりん亭」などがあります。満濃池周辺ではマラソン大会やウォーキング大会とのイベント等も年間を通じて開催されています。学習の場として遠足等で子供たちもたくさん訪れています。そのため、NPO法人まんのう池コイネットによりますボランティアガイドも行っています。NPO法人さぬき夢桜の会により、植樹3千本以上を達成し、新しい桜の名所となりつつあります。しかしながら、満濃池を周遊する来訪者の動線は強いものとは言えず、多くの来訪者は堤防から満濃池を眺め「大きい池があるなあ」といってそのまま帰るのが現状となっていると思います。

現在、自然との共生を主体としながら、また国営讃岐まんのう公園、香川県満濃池森林公園と一緒に安全、快適に散策ができるような周辺整備をし、自然散策、ウォーキング等ができる、満濃池を一周できる遊歩道の整備事業を進めているところです。コースはほたる見公園を起点として県道、町道、森林公園の中の遊歩道を通り、新設した遊歩道を経由して、1周約9

km のとなる計画をしています。本年、実施設計を終えまして、来年度には工事に着手したいと思っています。今後、保存活用計画を立てていくようになりますが、満濃池周辺地域がもっている資源や特性を最大限生かしながら、価値や魅力を多くの人に知ってもらえるよう、地域住民の方々とも一体となって観光振興を図り、交流人口の拡大による地域活性化を目指した活用計画にしていきたいと思っていますと同時に、環境保全にも取り組み次の世代により良き形として残していくような保存計画を立てていきたいと思っていますのでよろしくお願いします。

【信里芳紀】 今日皆さんに、アンケート用紙をお配りしています。これからまんのう町が保存活用計画、各種の計画を作っていくときに、満濃池は国の宝なので、町内の皆さんを含めて、いろいろな方のご意見を聞きたい、聞かないとダメだというところもありますので、ぜひ皆さんができる、こういった形で満濃池を未来へつないで欲しいという意見を書いていただき、出していただけたらと思います。

これでパネルディスカッションを終わります。

< パ ネ リ ス ト >



國重 進（満濃池土地改良区理事長）



平薄 裕（文化庁文化財第二課名勝部門主任文化財調査官）



増田拓朗（香川大学名誉教授：造園学・環化工学）



井原 緑（奈良県立大学教授：造園学・環境デザイン学）



糸田隆義（まんのう町長）

< コ ー デ イ ネ ー タ ー >



信里芳紀（香川県立ミュージアム主任文化財専門員）

閉会のあいさつ

【司会】 信里さん、パネリストの皆様、ありがとうございました。

それでは最後に、まんのう町教育長 三原一夫がお礼のご挨拶を申し上げます。

【教育長】 閉会に当たりまして、一言お礼のご挨拶を申し上げたいと思います。

今日は、大変お寒い中、このように大勢の皆様のご参会を得て、シンポジウムが盛大に開催されましたことを心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

最初に井原先生の基調講演がありました。古代、中世、近世、現代へと、文芸作品あるいはいろいろな史料を公開いただき、まんのう町のこの池を浮き彫りにしていただきました。また、魅力をふんだんに表していただきました。心より御礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

只今は香川県立ミュージアムの信里さんの名前によりまして、皆様方それぞれの専門分野の内容を的確にご披露いただきまして、ありがとうございました。心から御礼申し上げます。

満濃池はまだまだ魅力があるんだ、まだ言い尽くせない、表せないところがたくさんあるんだというお話をもいただきました。これから私たちの街に存在します満濃池をさらに光輝き、郷土に位置付けていくように、価値付けをしていきたいと思います。

今日は本当にありがとうございました。

【司会】 まんのう町では、関係者等のご意見をいただきながら、満濃池保存活用計画を策定し、満濃池の景観を未来へつなげていくよう保護に努めてまいりたいと思います。

以上を持ちまして、「満濃池名勝指定記念シンポジウム」を終了いたします。

長時間にわたってのご参加、誠にありがとうございました。



三原一夫教育長、閉会のあいさつ



司会、生涯学習課課長 松下信重

満濃池名勝指定記念 シンポジウムについてのアンケート

本日はありがとうございました。
ぜひ、アンケートにご協力ください。
あわせてものに○を付けてください。

- ①どちらからお越しですか?
最も多かったのは「() 内で記入ください。
() 市外 () 市内 () 町外 () 町内 () まんのう町
- ②年齢
() 10代 () 20代 () 30代 () 40代
() 50代 () 60代 () 70代 () 80代
() 90代~
- ③シンポジウムをどのようになりましたか?
() ポスター () チラシ () 町の行政組織
() 町のHP () ホームページ () 知人から
() その他
- ④シンポジウムはいかがでしたか?
() 良かったです () まあまあ悪かったです
() 普通 () 良くなかったです
- ⑤満濃池について詳しくなるのに必要なことはありますか?
() 满 池 () 現地での説明 () まんのう町の説明板
() その他の () その他
- ⑥満濃池の今後を考慮し、未来へ受け継いでいく上で、ご意見、ご要望があればご記入ください。

⑦その他ご意見、ご感想があればご記入ください。

ご協力ありがとうございました。
今後もまんのう町の文化財保護・歴史遺産にご協力いただけましたら幸いです。

当日配布したアンケート用紙

満濃池名勝指定記念シンポジウム 講演録

令和3年2月2日発行

編集・発行 まんのう町教育委員会 生涯学習課 文化財室
〒766-0202 香川県仲多度郡まんのう町中通875番地 琴南公民館内
電話 0877-85-2221 FAX 0877-85-2826
印 刷 株式会社 弘栄社